

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32641

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13098

研究課題名（和文）国王一座のレパートリーと少年俳優同士の関係性

研究課題名（英文）The Repertory of the King's Men and Relationships among Boy Actors

研究代表者

木村 明日香（Kimura, Asuka）

中央大学・文学部・准教授

研究者番号：70807130

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、シェイクスピアが座付き作者を務めた宮内大臣／国王一座の少年俳優に着目し、彼らの疑似兄弟関係、上下関係、ライバル関係が舞台の女性表象に与えた影響を考察した。第58回シェイクスピア学会（2019年）では『オセロー』の有名な「柳の場面」において、それぞれ歌唱と衣装のピン外しを担当した少年俳優たちの協同作業に関する口頭発表を行い、その後論文発表した。また第59回シェイクスピア学会（2021年）ではクィア研究のセミナーに参加し、ミドルトンの中期喜劇について少年俳優と成人俳優の権力関係と欲望の働きを論じると同時に、少年俳優たちのあいだで妊娠の演技が継承されるさまを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではシェイクスピアが座付き作者を務めた国王一座のレパートリーを少年俳優同士の横の繋がりに注目して再読した。『オセロー』を含む作品について、当時の舞台で女性を演じた少年俳優たちの疑似兄弟関係、上下関係、ライバル関係が舞台での女性表象にどのような影響を与えたのかを論じた。近年、少年俳優の徒弟としての立場に着目し、彼らが親方である成人俳優からどのような演技指導を受けていたかを考察する論考が増えているが、本研究では少年俳優は同じ親方の元で修行を積む年長者の徒弟や、元少年俳優の成人俳優からも多くを学んだことを明らかにし、少年俳優が役者としての経験を積んだ環境をより立体的に想像することを目指した。

研究成果の概要（英文）：This project focused on the boy actor in the King's Men and how his relationships with other boy actors or with his master would have affected his performance of women on the early modern English stage. Shakespeare's plays almost always required four boy actors, who must have perceived themselves as friends or rivals, as well as colleagues. In 2019, I gave a paper on 'the Willow Scene' in Othello, where Desdemona and Emilia are given huge responsibility to command the stage and increase pathos. The fact that Emilia needed to 'unpin' Desdemona while the latter was singing suggests that boy actors who played the roles had to collaborate very closely. In 2021, I gave another paper focusing on Middleton's More Dissemblers Besides Women. I emphasized the uniqueness of the figure of the pregnant Page, and discussed how the boy actor's performance of pregnancy may have been taught by his senior, who played a pregnant woman in the revival of The Duchess of Malfi.

研究分野：初期近代英国演劇

キーワード：少年俳優 女性表象 シェイクスピア 演技指導

## 1. 研究開始当初の背景

少年俳優は初期近代英国演劇の主要な特徴として、Davies (1939) がモノグラフを上梓するなど 20 世紀初頭から関心を集めてきたが、本格的な研究が始まったのは 1980 年代、90 年代である。Jardine (1983)、Belsey (1985)、Stallybrass (1992)、Shapiro (1996) が少年俳優 = ヒロイン = 異性装というアイデンティティの多層性が生み出すジェンダーの揺らぎを考察する一方で、Jardine (1992)、Orgel (1996)、Callaghan (1996) は少年俳優の多くがギルドのメンバーである成人俳優の見習いとして登録することで劇団に所属したことに着目し、家父長である親方に身体と労働を搾取される社会的弱者としての立場が少年俳優と女性の近似性を生み出したと指摘した。こうした見解は Mamujee (2014) に引き継がれているが、Bentley (1986)、Dusinberre (1996)、Madelaine (2003) は少年俳優が搾取されるだけの弱者ではなかったことを強調し、見習いと親方の間にはしばしば家族愛に似た感情があったこと、見習いが親方と観客の注目を奪い合うライバルになりえたことなどを論じている。2000 年代に入ると Harris & Korda (2002) から Dustagheer & Woods (2018) に至るまで、初期近代の劇場の物質的条件に関する研究書が数多く出版され、少年俳優についても教区記録などの公的文書から伝記的事実を割り出したり (Kathman (2004; 2005))、当時の医学書などを用いて思春期の男性の身体的特徴をより具体的に想像したりする試みがさかんになる (Munro (2005); Ropez (2007); Bloom (2007); Astington (2010); Sparey (2015))。2018 年 7 月に査読通過した拙論ではこうした流れを汲み、1610 年代に活躍した少年俳優 Richard Robinson とその親方である名優 Richard Burbage の関係性に焦点を当て、二人が『モルフィ公爵夫人』の初演 (1613-14 年頃) において反抗的なヒロインと抑圧的な兄を演じたことのメタシアトリカルな意味を考察したほか、初演時の Robinson の推定年齢と戯曲を含む一次資料から、彼がすでに男性的な声と体格を持ち合わせており、このことが男性権威への脅威としての公爵夫人像を強調した可能性を指摘した。

新歴史主義的な批評からの揺り戻しが起きる中、少年俳優への演技指導がどのように行われたのかを戯曲と歴史的資料の精読を通じて明らかにしようとする試みが盛んになってきている。その嚆矢となったのは McMillin (2004) の仕事である。Stern (2000) は初期近代の役者たちがいわゆる台本ではなく、自分の台詞とその出だしを知らせる前の台詞の最後のフレーズ (cue lines) のみが記された巻物 (rolls) を用いて役作りをしたことと、当時のリハーサルは役者が一人で台詞を覚える private rehearsal と少人数による partial rehearsal が主流だったことを念頭に cue lines に従って戯曲を読む手法 (cue reading) を生み出したが、McMillin はこれを用いて 1595 年から 1610 年頃までの宮内大臣一座 / 国王一座のレパトリーを再読し、少年俳優への演技指導がどのように行われていたかを考察した。先述の通り、少年俳優の多くは成人俳優の見習いとして親方の家に居候しながら役者としての経験を積んだが、McMillin は *Othello* をはじめとする戯曲の台詞を cue lines に従って書き出し、女役をごく少数のキャラクターから cue が与えられる restricted role と、多数のキャラクターから cue が与えられる wide-ranging role に分類した。前者は特定のキャラクターの台詞だけに集中していればよく、親方と一対一でリハーサルできることから経験の少ない少年俳優を指導するのに適しているが、後者は多くのキャラクターと複雑な絡みがあることからベテランの少年俳優を念頭に書かれた可能性が高い。Thomson (2016) の黙劇に関する研究は cue reading が必ずしも万能ではないことを示したものの、この手法は Tribble (2009) や Madelaine (2012) による少年俳優の演技指導に関する研究に大きく寄与した。特に Tribble は成人俳優が少年俳優を引き連れて登場する shepherding、成人俳優が少年俳優の能力よりも少し上の要求をすることで学びを与える scaffolding など、応用可能な用語を生み出した。

## 2. 研究の目的

一方、従来の研究はいずれも親方と見習いという縦の関係のみに着目し、少年俳優同士の横の関係を論じてこなかった。McMillin は親方と見習いの関係を教師と生徒のそれに喩えており、事実少年俳優の中には役者としての経験を積む中で識字能力や弁論術を身につけた者もいたはずだが、生徒は教師からだけでなく上級生を含めた他の生徒から多くを学ぶものである。Mann (2008) が論じるように女役と男役には異なる技術が求められたはずであり、少年俳優が別の少年俳優から学ぶことは少なくなかったと思われる。本研究ではこうした問題意識から国王一座のレパトリーにおける女性や子供の表象を少年俳優同士の様々な関係性の表われとして再読した。こうした観点から同劇団のレパトリーを再読する試みは現在行われておらず、本研究では親方と見習いという縦の繋がりに加え、少年俳優同士の横の繋がり視野に入れることで、少年俳優が役者としての経験を積んだ環境をより立体的に想像することを目指した。特に 2000 年以降、当時の劇場の物質的条件に対する関心が高まったことを受けて、少年俳優研究も両性具有性や性の攪乱を論じるイデオロギー的なものから、実在した少年俳優の年齢や身体的特徴を一次資料から割り出す歴史的なものへと回帰しつつあるが、戯曲と歴史資料の精読を旨とする本研究はこうした大きな批評的潮流にも資するものである。

### 3. 研究の方法

方法論としては、McMillin (2004) が参照した Stern (2000) の cue-reading による戯曲の精読を骨子とし、Tribble (2009) が編み出した演技指導にかかわるさまざまな用語、たとえば “scaffolding” (少年俳優の力量より少し高めの要求を出し、演技力の向上を目指す) “shepherding” (成人俳優が少年俳優を先導して入場する) “attentional devices” (成人俳優と少年俳優のセリフに共通の語句を用いることで、少年俳優の記憶を助ける工夫) などを活用しながら、少年俳優同士の協同作業がどのようなものだったのか記述することを目指した。また戯曲の精読に加え、本研究では親方である成人俳優と徒弟の少年俳優、少年俳優同士の関係性を明らかにするために当時の俳優たちの遺言書をまとめた Honigmann & Brock (1993)、俳優たちの伝記的資料をまとめた Chambers (1923)、Nungazer (1929)、Bentley (1941-68)、Eccles (1991-93)、Gurr (2004)、Kathman (2004; 2005)、Edmondson & Wells (2015) などを幅広く参照した。新型コロナウイルス感染症の影響で、2020 年度、2021 年度は渡英がかなわなかったが、2019 年度にはロンドンの大英図書館、国立公文書館などで資料収集を行い、『オセロー』の有名な柳の場面でデズデモーナが口ずさむバラッドの楽譜を含む一次文献を活用した。戯曲の精読と歴史資料(アーカイブス)の調査による研究を行った。

### 4. 研究成果

まずは 2019 年度～2021 年度の業績を一覧化する。

#### 発表論文(すべて単著)

- 2021 年 3 月 “A Paradox in Christopher Marlowe’s *Dido, Queen of Carthage*”、『紀要(言語・文学・文化)』第 128 号、1-13 ページ。
- 2021 年 3 月 “Henry VIII, dir. by Kotaro Yoshida”, *Shakespeare Studies*, vol. 59, pp. 43-45. 【査読付】
- 2020 年 3 月 「『オセロー』4 幕 3 場における Singing と Unpinning」、『紀要(言語・文学・文化)』第 126 号、1-18 ページ。
- 2020 年 2 月 「『ハムレット』の亡霊 鎧とナイトガウンの演劇的役割」、『英語英米文学』第 60 号、27-46 ページ。
- 2019 年 3 月 「『アントニオの復讐』と『ハムレット』における夫の亡霊と寡婦の記憶」、『*Shakespeare Journal*』第 5 号、36-51 ページ。【査読付】
- 2019 年 1 月 「『モルフィ公爵夫人』における少年俳優の舞台上の効果」、『*関東英文学研究*』第 11 号、39-50 ページ。【査読付】

#### 口頭発表(すべて単独)

- 2021 年 10 月 第 59 回シェイクスピア学会(10 月 10 日発表、於・オンライン) 学会セミナー「初期近代イングランドをクィアに読む・観る・考える」にて。発表タイトル「*More Dissemblers Besides Women* におけるクィアな欲望と再生産」
- 2019 年 10 月 第 58 回シェイクスピア学会(10 月 5 日発表、於・近畿大学) 「『オセロー』4 幕 3 場における singing と unpinning」

#### 賞罰

- 2019 年 10 月 日本シェイクスピア協会奨励賞

研究期間を通じて、少年俳優同士の関係性が舞台での女性表象に影響した例として、特に重要な発見があった二点について記述する。

まずは 2019 年に第 58 回シェイクスピア学会で口頭発表を行い、2020 年 3 月に論文発表した「『オセロー』4 幕 3 場における singing と unpinning」である。4 幕 3 場は「柳のシーン」(the Willow Scene) と呼ばれる有名な場面で、悲劇のヒロインであるデズデモーナが侍女のエミリアと寝室の中で会話を繰り広げるが、これは言い換えればシェイクスピアがクライマックス前の重要な場面を二人の少年俳優に委ねている場面でもある。Richard Burbage を含む経験豊かな成人俳優たちが退場し、たった二人舞台に残されたとき、少年俳優たちはどのように『オセロー』の哀愁を盛り上げるこの重要な場面を作り上げたのか。この場面で夫に殺されることを予感しているデズデモーナは「柳の唄」(the Willow Song) を口ずさみ、エミリアはそんなデズデモーナの衣装のピンを外す作業を行うが、この二つのアクションの同時進行を二人の少年俳優の協同作業として読み直した。戯曲を cue-reading に従って読み、またデズデモーナが口ずさむバラッドをシェイクスピアがどのように改変しているかを明らかにすることで、デズデモーナを演じた年長の少年俳優が、エミリアを演じた年少の少年俳優をサポートしながら場面全体の哀愁を作り上げていったさまが浮かび上がった。

次に 2021 年 10 月の第 59 回シェイクスピア学会にて、学会セミナー「初期近代イングランドをクィアに読む・観る・考える」にて発表した「*More Dissemblers Besides Women* におけるクィアな欲望と再生産」である。ミドルトンの中期喜劇として注目されることの少ない作品だが、シェイクスピアでもおなじみの異性装のヒロイン(小姓・the Page)を登場させながら、彼女を取り

巻くさまざまなクィアな欲望を前景化し、かつ男装している彼／彼女を妊娠・出産させることで、ミドルトンが既存のジェンダーの枠組みを超えた再生産のありようを提示している点を指摘した。また妊娠表象の歴史をたどると、ちょうど本作の数年前に国王一座はウェブスター作『モルフィ公爵夫人』を再演しており、ここにも少年俳優演じる妊婦が登場していたことがわかる。『モルフィ公爵夫人』において妊婦（主役の公爵夫人）を演じた少年俳優は *More Dissemblers* でも主役の公爵夫人を演じたと考えられ、より経験豊かなこの少年俳優が、あまり重要度が低い小姓役を演じた年少の少年俳優に、女性の妊娠・出産の演技を教えた可能性は多分にある（なお『モルフィ公爵夫人』の再演、*More Dissemblers* には、『モルフィ公爵夫人』の初演で公爵夫人を演じた元少年俳優も男役として登場しており、彼もまた、現役の少年俳優たちに妊娠・出産の演技を教えたかもしれない）。このように少年俳優たちが妊娠・出産についての知を共有・継承するさまは、当時の女性たちが男性禁制とされた妊娠・出産の現場でさまざまな女の秘密を打ち明け合った *gossip* の伝統と重なり合うのである。

以上、二つの業績を含め、全体として少年俳優同士の関係性に注目しながら戯曲を再読することは、当時の少年俳優の演技指導をめぐる従来の研究をさらに発展させるだけでなく、シェイクスピアをはじめとする劇作家たちがこうしたメタシアトリカルな俳優同士の関係性も視野に入れながら劇作を行ったということを明らかにした。国王一座のレパートリーはなお幅広く、より網羅的な研究を継続する必要があるが、少なくとも本研究が目指した主旨と方法論の有効性は十分に証明されたといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 木村明日香	4. 巻 126
2. 論文標題 『オセロー』4幕3場におけるSingingとUnpinning	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紀要（言語・文学・文化）（中央大学文学部）	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村明日香	4. 巻 128
2. 論文標題 A Paradox in Christopher Marlowe's Dido, Queen of Carthage	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 紀要（言語・文学・文化）（中央大学文学部）	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村明日香	4. 巻 59
2. 論文標題 Henry VIII, dir. by Kotaro Yoshida	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Shakespeare Studies	6. 最初と最後の頁 43-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村明日香	4. 巻 126
2. 論文標題 『オセロー』4幕3場におけるSingingとUnpinning	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紀要（言語・文学・文化）	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村明日香	4. 巻 60
2. 論文標題 『ハムレット』の亡霊―鎧とナイトガウンの演劇的役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語英米文学	6. 最初と最後の頁 27-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 木村明日香
2. 発表標題 『オセロー』4幕3場におけるsingingとunpinning」
3. 学会等名 第58回シェイクスピア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村明日香
2. 発表標題 More Dissemblers Besides Womenにおけるクィアな欲望と再生産
3. 学会等名 第59回シェイクスピア学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------